テンプス

２０１４年（平成 26 年）54 号

大きく枝を広げる和泉葛城山のブナ

も　く　じ

和泉葛城山ブナ林と保護増殖事業

古文書をひも解く
高すぎる年貢率のなぞ

古文書講座－市内にのこる身近な古文書－

企画展「名所図会と社寺境内図」より
明治時代の水間寺境内図

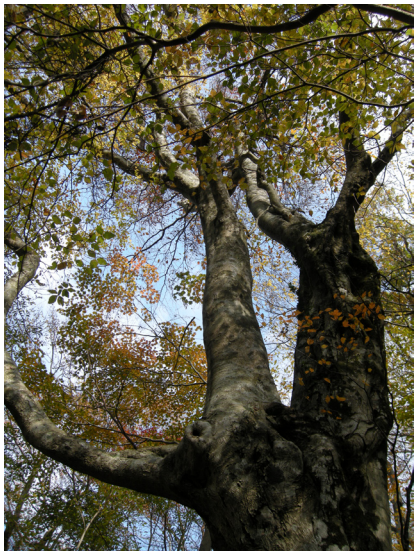
孝恩寺の仏像　ー菩薩③　地蔵菩薩ー

日紡貝塚工場の自動織機が里帰り

バッファゾーンに植栽したブナの若木

和泉葛城山ブナ林と保護増殖事業

◆和泉葛城山ブナ林は珍しい



標高 800 m を越える和泉葛城山の北斜面には、ブナ林が広がり、貝塚・岸和田市域と合わせて約８ha が国の天然記念物に指定されています。

ブナ林は中部地方以北や日本海側に広く分布していますが、太平洋側では分布が狭く、1,000 m程度の山で見られるのが普通です。ところが和泉葛城山のブナ林は太平洋側で、地理的にも南限に近く、しかも標高 858m と低い山でみられるなど他地域には見られない条件をもつことから大正 12 年（1923 年）に国の天然記念物に指定されています。大阪府内でごくわずかに残る自然のままの森としても大切なものです。

貝塚・岸和田両市の教育委員会では、公益財団法人大阪みどりのトラスト協会とともに、ブナ林を健全な状態で将来に引き継ぐために保護増殖事業を行っています。

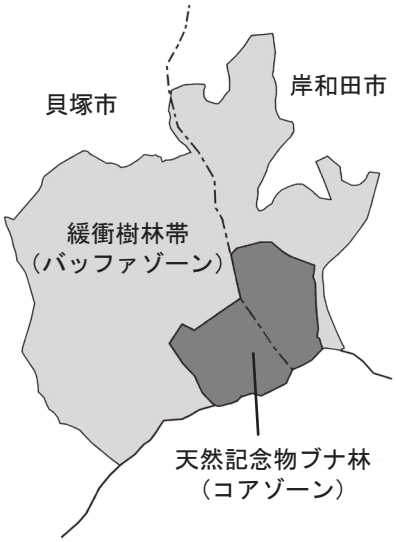
◆ブナ林を守り育てる

ブナの大木の枯死や若木の不足、地球温暖化の影響などから、ブナ林の絶滅の危険性が懸念されるようになり、昭和 63 年に大阪府・岸和田市・貝塚市と学識経験者により「和泉葛城山ブナ林保護増殖調査委員会」（現在は和泉葛城山ブナ林保護増殖検討委員会）を設立して調査を行いました。

調査により、指定区域の保全だけでは範囲が狭く、ブナ林を維持する事は困難であると考えられるため、天然記念物ブナ林（コアゾーン）の周辺の森林を緩衝樹林帯（バッファゾーン）に設定し、コアゾーンの保全を図りました（下図参照）。

現在、保護増殖検討委員会の意見をもとに、種子採集し養成したブナの苗木をバッファゾーンへ植樹するほか、ブナの位置や本数などを調べる毎木調査、ブナの生育に適した土壌や気温などのデータを集める生育環境調査、和泉葛城山のブナの特徴を調べる DNA 調査などを継続して行っています。

和泉葛城山（ブナ林）



上空から見た山頂部分（昭和 63 年）

◆もっとブナ林を知ってもらうために

ブナ林の現状や、その保全活動を伝えるため、啓発冊子の発行やブナ林の未来を考えるシンポジウム、植栽・自然観察ハイキングを行っています。

昨年度は秋の和泉葛城山自然観察ハイキングを行いました。平成 22 年度から 24 年度までは雨天による中止が続いており４年ぶりの開催となりましたが、保護増殖検討委員の田中正視氏を講師にむかえ、40 名を超える参加がありました。また、新たな取り組みとして地元の動植物に詳しい自然遊学館・きしわだ自然資料館と協力して開催することで、ブナを取り巻く生態系についても解説を交えながらハイキングを行うことができました。山頂で講師から食べられる木の実や、その実を食べに来た動物の足跡の説明を聞いた参加者は、実のなっている木を探しながら歩くなど、秋のブナ林の様子を楽しんでいました。

□和泉葛城山ブナ林自然観察ハイキングを開催します

日　　時：平成 26 年 11 月 15 日（土）午前９時～午後４時（雨天中止）
集合場所：南海本線「岸和田駅」東出口ロータリー（午前８時 40 分から午前９時までに受付）
募集人数：60 人（定員になり次第締切）
参 加 費：無料
持 ち 物：弁当、水筒、雨具、軍手、タオル、ハイキングのできる服装、靴、筆記用具など

申込み、問合せ先

電話、ファックス、Ｅメールのいずれかで下記にお申込みください。

公益財団法人　大阪みどりのトラスト協会
〒５５９－００３４　大阪市住之江区
南港北２－１－１０ ATC ビル ITM 棟 11F 西
TEL　０６－６６１４－６６８８
Fax　０６－６６１４－６６８９
Ｅメール　midori@ogtrust.jp

古文書をひも解く

◆高すぎる年貢率のなぞ

江戸時代の年貢は、歴史教科書によると「四公六民」「五公五民」という農業生産高に対して４割～５割が課税されていたと書かれています。

しかし、岸和田藩領では８割、９割といった非常に高い年貢率の村がいくつも見られました。例えば1723年（享保８年）の「御免帳覚」（井手家文書）によると、岸和田藩領92ヵ村中31ヵ村が８割を超え、うち17ヵ村が９割を超えるものでした。

では、なぜそのような高率で人びとの暮らしが成り立つのかというと、そもそもの数字があやしいからです。岸和田藩領は、豊臣秀吉の命令による太閤検地がおこなわれた地域とされ、竿を入れて実際の土地の面積を測って検地帳が作成されたと思い込んでいます。しかし、泉南地域では検地帳は実際のところ「差し出し」と呼ばれる村からの自己申告によるものだったのではないかと考えられています。そのため、実際の土地の広さを狭く偽ったり、検地帳には載らずに隠された土地（＝「隠田（おんでん）」）があったり、実際の面積からずれてしまっているのです。このことがのちに判明すると、もう一度測り直すのではなく年貢率を引き上げて対応しました。その結果、８割、９割といったとんでもなく高い年貢率となったのです。

大名の石高は、太閤検地をした豊臣秀吉や徳川家康以降の将軍らによって支配を許可されましたから、勝手に測り直すことができなかったという背景があります。岸和田藩は岡部氏がやってきた1640年（寛永17年）に６万石を拝領しましたが、２代行隆（ゆきたか）の代替わりの1661年（寛文元年）に二人の弟に領地を分け、５万3000石に改められました。享保８年の年貢は４万2477石余ありましたから、「五公五民」で計算すると約８万5000石、「四公六民」だと約10万6200石の規模になります。このことは、藩の格式を考えると低く位置づけられることになりますが、領地の石高が増えると国役普請や格式に見合った支出を求められ、大きな財政的負担がのしかかります。藩の大きさは「加賀百万石」などに代表されるように領地の石高で表現されます。岸和田藩５万3000石は本当ならもっと大きな藩だったということが、高い年貢率のなぞのなかに隠されていたのです。

享保八卯ノ御免帳覚（井手家文書）

古文書講座　－市内にのこる身近な古文書－

◆「江戸時代の年貢と村入用」を終えて

平成26年６月４日から７月２日にかけて毎週水曜日の５回にわたり、「江戸時代の年貢と村入用」と題して古文書講座を開催しました。

今回は、江戸時代には土地にかかる税としての年貢と、生活に直結する水利の維持管理など村全体でかかる必要経費を村人どうしで分担する村入用のしくみについて取り上げました。

年貢はその年にとれた米を領主へ納めるしくみで、幕府領では三分の一が、岸和田藩領では四分の一が銀で納められました。それは農家における収入が米以外からも多くあったことを示しています。この泉州地域でいえば、木綿の栽培がその中心になり、農家の現銀収入として田んぼでも木綿作りが進められました。これ以外にも菜種や麦、たばこ、甘蔗（かんしょ＝さとうきび）などの栽培もおこなわれました。また、農間余業という手仕事からの収入もありました。かつての近木庄（こぎのしょう）地域で作られたことから「近木櫛」とも呼ばれた櫛は京都で販売されました。年貢そのものは土地の大きさや良し悪しで決まりますが、農家の収入としては米以外の収入が意外と大きかったことがわかりました。村入用は年貢と一緒に集められますが、今でいうところの「町会費」のようなものです。農業に欠かせない水路の修繕や道路の管理、村人たちの寄合、さらには村と村との利害をめぐる裁判費用など、村全体で必要とされる事柄に当てられていました。講座ではこうした当時の人びとのようすを古文書から読み解いていきました。

受講者のみなさんからは、「江戸時代の年貢の大枠が理解できたと思う」「村入用・税金は年貢（米）だけだと思っていました。それにしても取りすぎ。」といった感想も寄せられました。

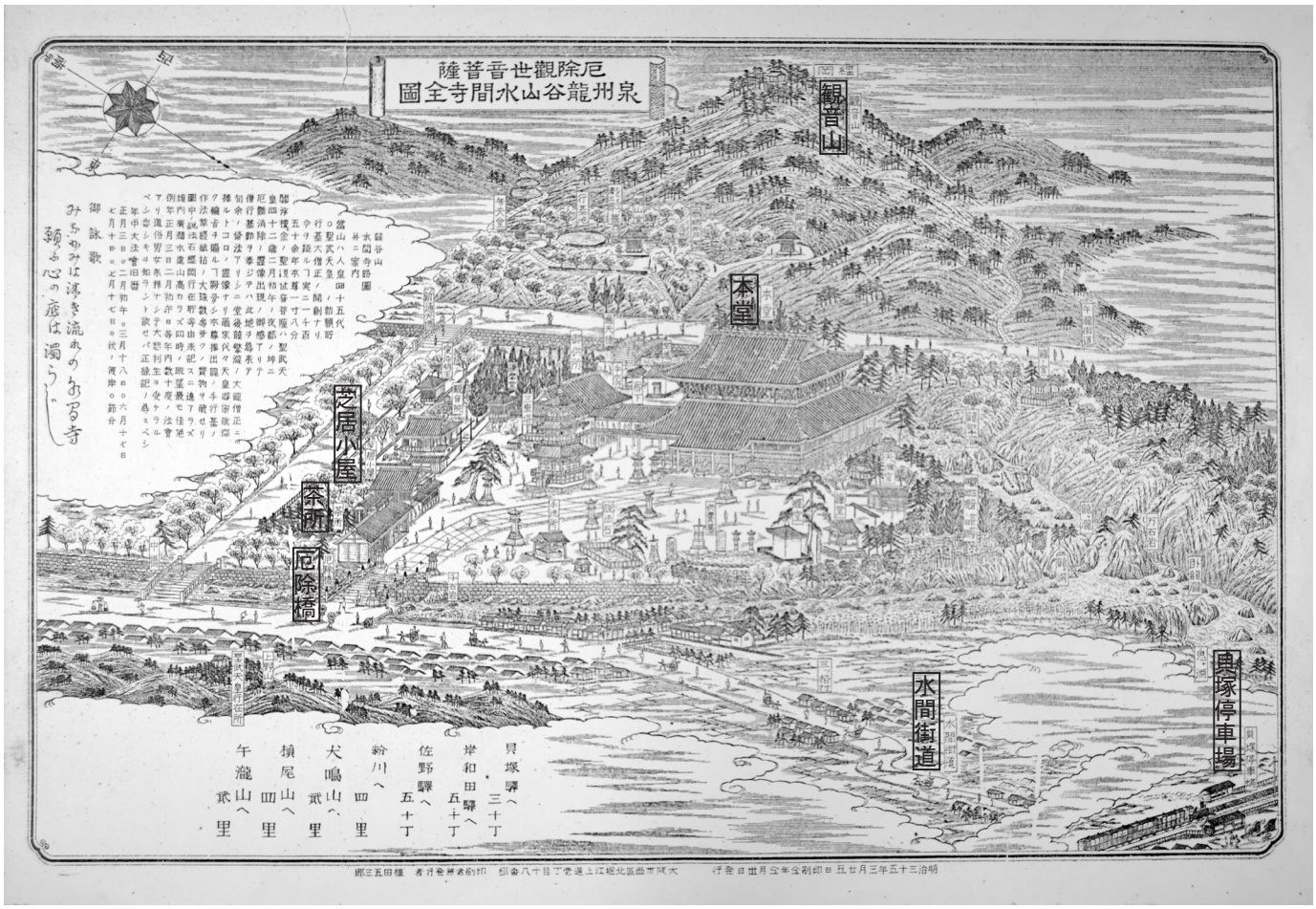
このように、古文書講座では江戸時代の古文書をもとに、当時の人びとの暮らしに注目していますので、奮ってご参加ください。

□古文書講座45（通算212回～216回）開催のお知らせ

テ ー マ：江戸時代の家普請
日　　時：第１回　平成26年10月８日、第２回　10月15日、第３回　10月22日
　　第４回　10月29日、第５回　11月12日
　　いずれも水曜日午後１時30分～４時
会　　場：貝塚市民図書館２階視聴覚室
資 料 代：100円
申　　込：住所、氏名、電話番号を明記の上、はがき・Ｅメール・ＦＡＸ、電話いずれかで、
　　下記まで事前にお申込みください。
連 絡 先　〒597-8585　貝塚市畠中１丁目12－１（貝塚市民図書館２階）貝塚市郷土資料室
　　ＴＥＬ　072（433）7205 ／ ＦＡＸ 072（433）7107
Ｅ mail　shiryoushitsu@city.kaizuka.lg.jp

企画展「名所図会と社寺境内図」より

明治時代の水間寺境内図



江戸時代後半から明治・大正時代にかけて、全国各地の神社仏閣で一枚刷りの境内図が数多く出版されました。今回は、1902 年（明治 35 年）に出版された水間寺の境内図「厄除観世音菩薩泉州龍谷山水間寺全図」（上写真、NPO 法人摂河泉地域資源研究所所蔵）を紹介します。

この境内図は、水間寺周辺を鳥瞰図（ちょうかんず）風に描いたものです。「本堂」や「三重塔」が建つ境内地を中心に、本堂背後には「観音山」（現在の市立水間公園）を描きます。境内と「観音山」には諸堂が建ちならび、現在とほぼ同じ景観を呈していますが、「厄除橋」を渡ったところに建つ「茶所」の隣には、現存しない「芝居小屋」が描かれています。

また画面手前には、1897 年（明治 30 年）に設置された南海鉄道の貝塚駅「貝塚停車場」と参詣道である「水間街道」が描かれています。「貝塚停車場」前と「水間街道」には数台の人力車が描かれ、当時の交通手段が徒歩と人力車であったこともわかります。さらに画面左には雲が描かれ、そこには水間寺の沿革や年中行事、貝塚駅等からの道のりが記載され、旅行案内的な要素も見てとれます。

こうした境内図は、神社仏閣や門前の商家などで頒布され、当時の旅行者がみやげ物として郷里へ持ち帰り、全国へ流通したのでした。

※この絵図を含め、『和泉名所図会』や一枚刷りの社寺境内図を紹介した企画展「名所図会と社寺境内図」は、平成 26 年 10 月 19 日（日）まで、貝塚市郷土資料展示室（貝塚市民図書館２階）にて開催しています。

孝恩寺の仏像　－菩薩③　地蔵菩薩－

貝塚市木積(こつみ)の孝恩寺には、平安時代の制作で地方色豊かな 19 躯(く)の仏像が安置されており、うち 18 躯が重要文化財に指定されています。今回は、菩薩のなかから地蔵菩薩立像を紹介します。

【重要文化財】木造地蔵菩薩立像　１躯

時　　代　平安時代後期（10 世紀後半）
像　　高　136.4 ｃｍ
指定年月日　1913 年（大正 2 年）4 月 14 日

地蔵菩薩は、六道（りくどう）の一切衆生（しゅじょう）の苦を除き、福利を与えることを願いとする菩薩です。日本では、道祖神（どうそじん）や子どもの守り神として信仰され、貝塚市内でも各所のお堂や街道沿いの道しるべとしてあちこちでまつられている最も身近な仏様です。

本像は、頭をまるめた僧形で、身には裳（も）をつけ、大衣を通肩（つうけん）にまとい、現在は右手に錫杖（しゃくじょう）、左手に宝珠（ほうじゅ）を持って蓮台（れんだい）上に立ちます。しかしながら、両手首先と両足先は後世のものであり、像の製作時期から判断すると、本来は右手には錫杖を持たず、掌（てのひら）をこちらに向け垂直に足らす古い形式の地蔵菩薩像であったと思われます。

構造は、頭頂より裾先まで、両袖口を含んでカヤの一材で彫り出し、白土下地の上に彩色を施しています。頭部は大きく、肩幅も広いなど、各部に古い様式が見られますが、全体的に彫り口が浅いことから、製作は 10 世紀後半もそう遡らない時期のものと思われます。

＜用語解説＞

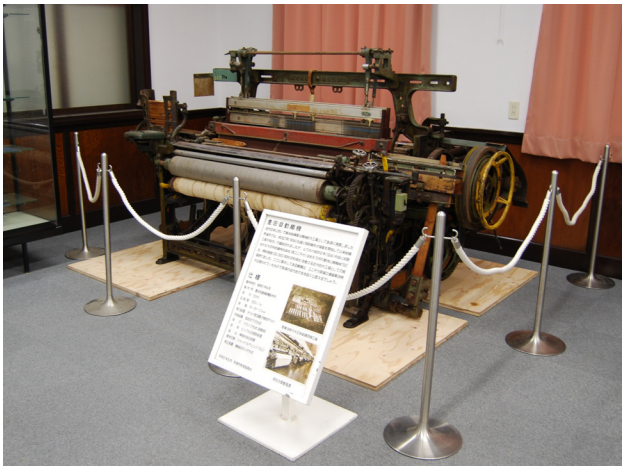
・六道：すべての衆生が生死を繰り返す六つの迷いの世界。すなわち、天上・人間・阿修羅・畜生・餓鬼・地獄をいう。

・衆生：生きとし生けるもの。

・道祖神：集落の境界や峠などの道路沿いにまつられて、外来の疫病や悪霊を防ぐ神。のちには、縁結びの神、旅行安全の神、子どもと親しい神とされる。

・通肩：二枚の布を体に巻きつけて両肩を包む着衣方法の一つ。

日紡貝塚工場の自動織機が里帰り

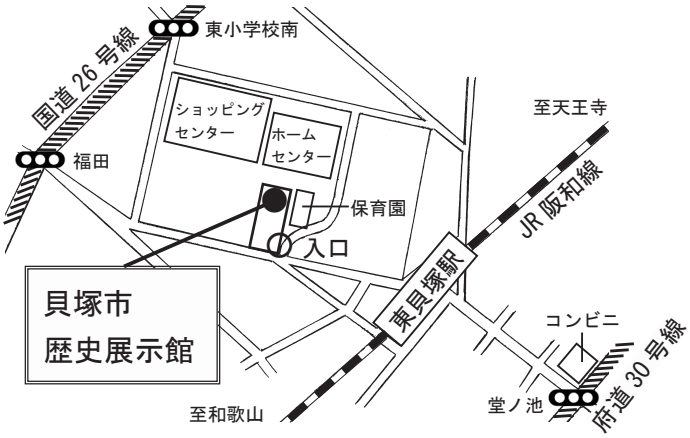


去る８月 21 日（木）、奈良県大和高田市に長期貸出していた豊田自動織機が貝塚市に帰ってきました。

この自動織機は、日本の機械産業の発展・近代化に貢献したトヨタグループの創始者、豊田佐吉（1867～1930 年）が 1924 年（大正 13 年）に発明、完成させた「無停止杼換式（ひがえしき）豊田自動織機」の量産機で、1936 年（昭和 11 年）４月に製造されたものです。

当時の貝塚町半田で操業していた大日本紡績株式会社貝塚工場に大量設置されたうちの１台で、工場で生産された紡績糸から大量の織布を生産するために使用されました。

帰ってきた自動織機は貝塚工場跡地の貝塚市歴史展示館（ふるさと 知っとこ！館）で展示公開することになりました。この自動織機は、高速運転中に少しもスピードを落とすことなく杼（ひ＝織物を織るときに、たて糸の間によこ糸を通すのに使われる道具）を交換してよこ糸を自動的に補給する自働杼換装置をはじめとした自動化を実現し、総合的性能と経済性で当時世界一と評価されたものです。この機会にぜひ一度足をお運びいただき、大工場に設置された織機の迫力と当時の紡績工場の雰囲気をご体感ください。



貝塚市イメージ
キャラクター
つげさん

貝塚市特産品「つげ櫛」をモチーフとしたデザイン。
イベントごとが大好き。
普段はのんびり、でも祭りには萌えます。

かいづか文化財だよりテンプス 54 号

平成 26 年９月 30 日発行
貝塚市教育委員会
〒 597-8585　貝塚市畠中１丁目 17 －１
Tel（072）433-7126　Fax（072）433-7107
Email:shakaikyoiku@city.kaizuka.lg.jp
印 刷：㈱帯谷印刷所
※テンプスとはラテン語で「時」を意味します。
年４回発行：各 1,000 部
印刷単価：　41.58 円